前回までのあらすじ

流遠(るとお)やみひめは、小学六年生の普通の女の子。
学校があって、友達がいて、好きな男の子がいる。
しかし、そんな平穏な生活は、とある少女との出会いで一変してしまう。
少女の名はツバキ・タカチホ。
彼女は地球とは別の星・惑星ゼヘナから来たという。
ツバキの目的は〈カタストロ〉と呼称される敵性体の殲滅(せんめつ)であり、彼女はそのための存在――〈機獣(きじゅう)少女〉だった。

〈カタストロ〉を殲滅(せんめつ)し、ツバキはファフロウ姉妹と共に故郷に帰った。その直後、紅(あか)く染まっていた世界は元の色彩を取り戻し、これで事件は解決したと思われた。
しかし、戦いを終えたやみひめを待っていたのは、『ツバキも〈カタストロ〉も現れなかった今日』だった。被害があった公園や駐車場も、被害を受けた者達も、すべてが『最初からなかった』事になっていた。
誰も事件があった事など知らず、世界が改変された事にすら気付いていない。
例外は事件の中心にいた少女・やみひめと、彼女の想い人である少年・橘(たちばな)アサトだけだった。
しかし、彼等の気持ちなど世界は斟酌(しんしゃく)しない。当たり前のように時は流れ、日常は続いていく。
そのはずだった。

※登場人物紹介はこちら

機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL REVIVAL

夢を見た。

知らないはずなのに知っている、既視感にも似た、不思議な感覚の夢。

夢の中の『彼女』は、狼の姿をした巨大な戦闘兵器で、戦場である広大な荒野を、縦横無尽に駆け抜けていた。荒々しいはずなのに、その光景はとても眩しく、そして綺麗だった。

操縦席には、よく知る少年の面影を感じさせる青年がいて、共に戦場に立てる事を至上の喜びとしていた。

戦闘兵器と、その搭乗者。

互いが互いを必要とした、ある種の共依存。

違う世界の『自分』と『彼』。

知らないはずなのに識っている。

これは流遠やみひめの中にある、もう一人の自分――『ヤミヒメ』の記憶だ。

〈狂襲姫〉と呼ばれ、畏怖と憧憬の対象とされた、戦闘機械獣だった世界の自分。

しかし、『彼女』はもういない。

もう一人の自分の中に融け、眠りに就いた。

自分のすべてを託すように。

だから、託されたやみひめは幸せにならなければいけない。

『彼』と添い遂げなければならない。

もう一人の自分のために。

そして、今の自分自身のために。

やがて、微睡みの中、やみひめの前に『彼女』が現れた。

二十歳前後の人間の娘の姿で、迎えるような仕草で両手を広げる。

その表情は、『彼女』が最後に見せたのと同じ、優しい笑顔だった。

やみひめは、『彼女』に告げる言葉が自然と浮かんだ。

『久しぶり』でも、『また会えたね』でもなく。

迎えてくれる相手になら、こう言うべきだろう――

「ただいま」

——おかえり。

第二十話

『ツドウショウジョタチ』

「――!?」

流遠やみひめは、はっと目を見開いた。

何か夢を見ていた気がするのだが、内容がまるで思い出せない。夢など得てしてそういうものだが、とても大事な内容だった気がする。なので、思い出そうとするのだが、こればかりはどうしようもない。

やがて、覚醒したばかりの意識が、ようやく本調子になってくると、思考も冷静になってくる。そして、自分が直前まで何をしていたかを思い出し、記憶を辿る作業を中断した。

「クラウ……!?」

そう。小学校からの帰り、やみひめは迎えに来てくれたアサトと合流した後、共に下校していた友人のクラウと別れた。しかし、すぐに胸騒ぎがして、彼女の元に駆け付けた。道で蹲るクラウは、〈カタストロ〉に取り付かれていた時に身に付けていた黒いドレス姿で、咄嗟にやみひめはMBジャケットを展開し、〈分断するもの〉を発動させたのだが――

異変はそこで起きた。

助けを求めるクラウの手に、やみひめの手が触れた瞬間、視界が光に包まれた。

あれから、どれくらい時間が経ったのか、まるで見当もつかない。一瞬かもしれないし、数時間かもしれない。だが、一瞬であったなら、クラウは近くにいるはずだ。

きょろきょろと辺りを見回す。其処は、意識を失う直前までいた風景とは異なる、見知らぬ荒野。ふと見上げると、真昼の月が二つ空に浮かんでいる。

「……」

ありえない。

だが、この風景をやみひめは知っている気がした。地球のそれとは微妙に異なる、多量の機素を含んだ大気も。あちこちから感じる、濃い金属の匂いのようなものも。

それらに、不思議と懐かしさすら覚えた。

気持ちを落ち着けて、改めて周囲を見渡す。

「クラウ!」

遠くばかりを見ていたため気付かなかったが、ほんの三メートルほど離れた場所に、クラウはいた。棒立ちで、呆然と目の前の景色を眺めている。

同じ小学六年生とは思えない長身とプロポーション。一部に白いメッシュが入った、長い黒髪。どこかぼんやりとした真紅の瞳。

やみひめのクラスメイトにして親友の少女、クラウ・P・ブランだ。

しかし、その身に纏う衣装は、やはり直前にも見た黒いドレスだった。白いラインがア

クセントになった、機械的な意匠。両手には巨大な爪を思わせる手甲。

クラウの中の〈カタストロ〉は、やみひめによって完全に分断されたはずなのに……。

「どうして……」

すぐにでも駆け寄りたい衝動を抑えて、やみひめは考える。クラウは今、どういう状態なのか。意識はあるのか。自分の声は届くのか。

あの姿になった彼女の強さは知っている。不用意に近づいては危険すぎる。

「……」

ゆらりとクラウが、こちらを向く。その大人びた容貌には、戸惑いの表情が浮かんでいる。どうやら、意識はあるらしい。

「クラウ。私の事、判る……？」

「やみひめ……」

やみひめと視線が合うと、クラウは脱力したように膝を地面に着いた。

「クラウ！？」

そのまま地面に倒れる直前、慌てて駆け寄るやみひめより早く、クラウの身体を抱きとめる者がいた。

魔女のような服装。緩く波打つ銀色のセミロング。やみひめの位置からは背中しか見えないが、体格で女性だと判る。まだ十代の少女だろう事も。

やみひめは、クラウを抱きとめた少女の姿に見覚えがあった。

「タオエンさん……？」

やみひめが半信半疑で少女の名を呼ぶと、

「――わたしもいるよ！」

「ふぁっ！？」

突然、背後から元気の良い声が聞こえ、やみひめは素っ頓狂な悲鳴を上げてしまった。正確には、声をかけられた事より、耳と尻尾を同時に撫で回された事に驚いたのだが。

「ベアトリーチェさんも……？」

やみひめが慌てて振り返ると、其処には自分と同年代くらいの少女がいた。魔女のような服装は先の少女と酷似しているが、髪は茶色のショートヘア。猫を思わせる黄玉のような瞳をしており、やはり猫を思わせる悪戯っぽい笑みを浮かべている。

「お久しぶりです」

意識を失い、普段の服装に戻っているクラウを抱えた――ちなみに、いわゆる『お姫様だっこ』だ――銀髪の少女が、抑揚のない口調で告げてきた。どこか神秘的な色を湛えた金色の瞳と、綺麗だが表情に乏しい、両方の意味で人形のような容姿は、やはり予想して

いた人物のものだった。
妹のベアトリーチェと、姉のタオエン――ファフロウ姉妹である。
先の〈カタストロ〉との最後の戦いの場に現れた二人の少女。彼女等はツバキと共に、『門（ゲート）』の向こうへ行ったはずだ。
「じゃあ、此処（ここ）って……」
やみひめの言葉をすべて聞くまでもなく、魔女のような格好をした姉妹は、彼女の予想を肯定（こうてい）した。
「そういう事だね」
「ようこそ――惑星ゼヘナへ」

●
●
●

少女は夢で声を聞いた。
『――名前をあげるよ。あなたにぴったりの、あなただけの名前を』
いつかの自分に向けられた言葉。
必要とされなかった自分を肯定（こうてい）してくれた言葉。
とても優しくしてくれた、大事にしてくれた、大好きだった人の言葉。
その人の名前は――

●
●
●

「ロゼット……」
ゆっくりと意識が目覚めていく過程のぼんやりとした状態で、なぜ、そんな名前が口をついて出たのか、クラウ自身にも判らなかった。何か夢を見ていた気がするのだが、その内容も思い出せない。ただ、とても懐かしい相手と再会したような、そんな暖かさが、ほんのりと胸に残っている。
「――はい」
「……？」

不意に聞こえた女性の声。それが、呼びかけに対する返事だと、すぐには理解出来なかった。当然だ。クラウは無意識に呟いただけで、それが人の名前だと認識していなかったし、呼びかけたつもりもないので、返事が来るとは予想もしていなかったのだから。そもそも、近くに人がいた事すら気付かなかった。

声のした方を向くと、其処にいたのは妙齢の女性だった。見た目通りなら二十代前半から半ばくらいだろうか。身に付けた白衣はやや汚れており、医者ではなく、機械系の技術者の類を思わせる。ひょっとすると、実際にはもっと年上かもしれない。

「あの……」

朗らかな笑顔を浮かべる女性に見つめられ、クラウは口ごもる。彼女に見つめられると、上手く言葉が出てこない。

長い金髪と、澄んだ青い瞳。とても綺麗な容姿でありながら、美人にありがちな近寄りがたさが微塵もない。

彼女のイメージを端的に表すなら、『優しそうな人』だろう。

白衣を着ていなければ、保母さんとか小学校の先生、もしくは単純に『お母さん』という言葉が浮かぶ。それがなぜなのか、クラウ自身にもよく判らないが。

「気分はどう？　どこか痛かったり、違和感があったりしない？」

口ごもるクラウに苛立つ素振りを見せるどころか、むしろ気遣うような口調で訊ねてくる白衣の女性。それが彼女の人心掌握術なのか、生来の気質なのかは判らないが、クラウは後者だと感じた。

「大丈夫、です……」

「そう、良かった」

クラウの返答に、女性は心底、安心したといった表情を浮かべた。

（やっぱり、お母さんみたいな人だな……）

まだ若い女性に対して、その評価は失礼かもしれないと思いつつ、クラウは胸中でそう感じていた。

「自己紹介は不要かもしれないけど、一応ね。私はロゼット・コダール。L．C．ファクトリーのエンジニアです」

女性――ロゼットの言葉に、クラウは言葉を失う。先ほど自分が無意識に呼んだ名前と同じだったからだ。その反応に、ロゼットも少しだけ困惑気味な表情を浮かべる。

「あれ？　さっき、私の名前を呼んでたから……知らなかったの？」

こくりと首肯するクラウ。

「そうなんだ。じゃあ、どうして私の名前を――」

知っていたの――という言葉を飲み込み、ロゼットは話題を変えた。クラウの表情を見て、訊(き)いても困らせるだけだと察したのだろう。実際、クラウ自身も答えを持っていない。

「あなたのお名前、訊いてもいい？」

そんなつもりはないのかもしれないが、ロゼットの口調は子供をあやすような雰囲気で、年齢相応に見られる事がほとんどないクラウにとっては、新鮮だった。

「クラウ・P・ブランです。小学生です……一応」

「へえ。小学生なんだぁ……小学生？」

聞き間違えただろうかと、ロゼットが小首を傾げる。随分と幼い仕草だが、不思議と彼女がやると違和感がない。

「……はい」

「えっと、小学十二年生……とか？」

「六年生です……」

「じゅうにさい？」

「はい、十二歳です」

「……」

「……」

気まずい沈黙が二人の間に横たわる。確かに、クラウの容姿を見て、実年齢を当てられる者は皆無だろう。そして、彼女が冗談を言っている訳ではないと判っても、すぐにそれを受け入れられないのも仕方がない。常識に囚(とら)われてはいけないと言われるが、常識とは人間の寄って立つべきものでもある。そう簡単に覆(くつがえ)されては、何を信じていいか判らなくなってしまう。

しかし――

「クラウ――〈機獣少女〉に興味あるかな？」

「え……？」

常識に囚われない人間というのも稀(まれ)に存在する。

「まだ十二歳。それは無限の可能性を秘めているって事だよ！」

「……」

どうやら、ロゼットはクラウの言葉が信じられなかった訳ではなく、先の言葉通り、『無限の可能性』とやらを感じて言葉が出なかったようだ。

「どうかな？　とりあえず、適性検査だけでも受けてみない？　大丈夫。怖くないから」

やや鼻息を荒くして、じりじりとにじり寄ってくるロゼットの迫力に気圧(けお)されて、クラウは変な汗をかくのを感じた。これ、彼女が男性だったら、完全にアウトな絵面(えづら)だ――と。

――ピー！

不意に、スポーツの試合で審判が吹く、笛（ホイッスル）のような音色が響いた。

「ロゼット、イエローカード！」

「嫌がっている女性に対し、無理矢理というのは見過ごせません。ちなみに、あと一枚で退場ですよ」

恐らく、状況が判る場所にいたのだろう。一人は、笛が付いた紐（ひも）を首から下げ、黄色のカードを掲げた、中学生くらいの茶髪の少女。もう一人は、高校生くらいの、綺麗だが表情に乏しい銀髪の少女。どちらも頭部には獣のような耳が付いていて、腰の低い位置には尻尾のようなものが見える。

「……なんで、そんなもの持ってるの？」

その二人に呆れたような言葉を告げたのは、最後に姿を見せた人物だった。長い黒髪をポニーテールにした、小学校高学年くらいの少女。

彼女の事は知っている。見間違えるはずがない。

「やみひめ！」

クラウのクラスメイトにして親友でもある、流遠（るとお）やみひめだ。

彼女の名を口にするなり、クラウはベッドから勢いよく降りると、しかし駆け出す事叶（かな）わず、その場にへたり込んでしまう。急に立ち上がったため、軽い立ち眩（くら）みを起こしたのだろう。

「クラウ、大丈夫！？」

すぐに駆け寄り、やみひめがクラウの身体（からだ）を支える。すると、クラウも自らの腕をやみひめの背中に回し、額（ひたい）を彼女の胸元に押し当てた。その行為は甘えているようにも、表情を相手に見せないようにしているようにも見える。

「クラウ……？」

やみひめが首を傾（かし）げるのが、気配で伝わってくる。クラウの身体が震えているのに気付いたのだろう。

「やみひめ……私……ごめんね……っ」

「え？　どうしたの……？」

顔を俯（うつむ）けているため、やみひめからはクラウの表情が見えない。それでも、途切れ途切れの言葉に嗚咽（おえつ）が混じっていれば、その表情は察する事が出来る。

クラウは――泣いていた。

●
●
●

ほんのりと甘い香りが室内を満たす。テーブルの中央に置かれた焼き菓子やケーキ。湯気を燻らせる人数分のマグカップ。それを囲む五人の娘達。

それはまさに、優雅なお茶会の様相を呈していた。

「このチョコクッキー、美味しい！　もう一個」

「ベアトリーチェ、もう三個目ですよ。甘いものはほどほどにしないと」

「大丈夫だよ、タオ姉。ほら、まだまだ育ち盛りだから♪」

「いいなあ、若いって。私には怖くて真似出来ないよ」

「ロゼットさんも、随分とお若く見えますが」

「いやいや。こう見えても三十二歳だから」

「え！？　ロゼットって三十二なの！？」

「見えませんね……」

「あはは、ありがとう。でも、あなた達みたいに、全部が栄養やエネルギーに変換されないから。食べた分、お腹周りについちゃうから」

朗らかに歓談しながらティータイムを満喫するベアトリーチェ、タオエン、そしてロゼットの三人を余所に、残りの二人は、静かな雰囲気を漂わせていた。同じテーブルを囲っていながら、明らかにグループが二つに分かれており、しかも温度差が激しい。たまたま相席になってしまった、まったく別のグループのようだ。

クラウが見知らぬ部屋で目を覚まし、やみひめと再会したのが約一時間前。嗚咽混じりに謝罪の言葉を繰り返すクラウを宥め、この談話室に移動したのが十分ほど前になる。ちなみに、クラウが目を覚ましたのは医務室で、この建物はロゼットの仕事場らしい。

「……」

「……」

やみひめも、隣に座るクラウも、共に無言。

罪の意識に苛まれているクラウに対し、やみひめは彼女の気持ちの整理を待っている。我関せずと歓談に興じている残りの三人だが、場の空気を重くしないために、あえて空気を読んでいないのだろう。

やみひめは、自分の目の前に置かれたマグカップを口元に運び、注がれたミルクティーを口に含む。口内に広がるほどよい甘味と、鼻腔をくすぐる優しい香りが心地良い。

リラックスした頭で、ここまでの事を思い返す。

やみひめは、クラウと共に、ツバキの故郷である惑星ゼヘナに転移した。

地球によく似た環境、日本とそう違わない街並み、しかし月が二つある世界。ツバキを送るため、『門』の先に消えたファフロウ姉妹の存在。信じられない状況だが、受け入れるしかない。

何より、やみひめ自身が、此処がゼヘナだと確信している。彼女の中の『ヤミヒメ』の記憶が、帰ってきたと感じているし、やみひめも懐かしさのようなものを感じていた。

此方に来て、すぐにファフロウ姉妹と合流出来たのは幸運だったが、それは姉のタオエンが、『門』が開くのを感じたためだと聞かされた。それでも、彼女等がゼヘナに留まっていなければ、途方に暮れていた可能性もあるので、やはり幸運だったのだろう。

それから彼女等の提案で、このロゼットの勤務先である〈L．C．ファクトリー〉に移動した。外観からは『研究所』のようなイメージが浮かぶ建物で、実際、〈機獣少女〉の使うMBデバイスの研究や開発を行っているらしい。

異邦人が二人、しかも片方は非常に危うい不確定要素を抱えている。そんな自分達を受け入れてくれたロゼットには、感謝してもしきれない。

ちなみに、『ロゼット・コダール』というのは本名ではなく、〈L．C．ファクトリー〉の創始者の名前を襲名したものだそうだ。つまり、彼女は此処ではかなりの、下手をすると最高レベルの権限を持っている可能性もある訳で、子供を二人招き入れるくらいは出来てしまえるのだろう。

人心地つき、クラウが目を覚ましたと聞かされて、再会した際の彼女の取り乱しようは、普段のクラウを知っている者から見れば尋常ではなかった。やみひめに支えられた身体は震え、途切れ途切れの言葉は、謝罪の言葉を延々と繰り返していた。

地球での『世界改変』後、クラウもまた、一連の〈カタストロ〉に関する事件の記憶を失っていた。

やみひめは、それでいいと思っていた。忘れてしまえるなら、忘れてしまった方がいい事もある。だから、ツバキのMBデバイスである〈カグツチ〉の人格を再起動させる際、ヤミヒメとしての記憶は封印したままにした。今の〈カグツチ〉は、ツバキのパートナーであるMBデバイスであり、それ以外の何者でもない。その行動は、やみひめの独善かもしれないが。

しかし、クラウは思い出した。思い出してしまった。

何がきっかけだったのかは判らない。地球で突然、〈カタストロ〉に取り付かれていた際の黒いドレス姿になった事かもしれないし、転移現象によるものかもしれない。

なんにせよ、事件の記憶を思い出してしまえば、それが自分の意思でした行動でなくて

も、クラウは自分を責めるだろう。

優しい少女なのだ。

自分を責める事は出来ても、他人を傷付ける事は出来ないような。

世界は変わった。だから、改変前の世界で、〈カタストロ〉に取り付かれていた間にやった事も、すべてなかった事になっている。つまり、クラウは誰も傷付けていないし、何の罪も犯していない――理屈の上では。

「……クラウ」

「！」

やみひめが声をかけると、クラウの肩がびくりと強張った。このまま待っていても、クラウがつらいだけだと判断しての事だったが、彼女の反応を見ると二の足を踏みそうになってしまう。

「世界改変があって、全部なかった事になってるって話したよね」

やみひめの言葉に、クラウは無言で頷く。

この話はすでにしている。だから、クラウが気に病む必要はない、そもそも悪いのは〈カタストロ〉で、クラウには何の責任もない、とも。

だが、それで罪の意識を感じなくなるような少女ではないのだ。罪を償うどころか、罪自体がなかった事になってしまった。それはつまり、クラウにとっては、永遠に罪を償えなくなったのと同義だ。

誰も覚えていないから、誰も許してくれない。

「私が覚えてるよ」

「え……？」

ずっと俯いていたクラウが、はっと顔を上げた。ようやく、此方を向いてくれた。

「クラウと戦ったのも、クラウに刺されて痛かったのも、クラウに殺されたのも、全部覚えてる」

「……ごめんね……ごめんなさい――」

やみひめの口調に、責めるようなニュアンスは含まれていない。それでも、罪悪感に苛まれているクラウにしてみれば、恨み言のように聞こえたのだろう。絶望に表情を歪め、瞳を潤ませ、謝罪の言葉を告げる。

しかし――

「うん、許す！」

返ってきたのは、クラウが呆気にとられるような朗らかな言葉だった。彼女にしてみれば、自分を責める罵詈雑言を予想していたのだろう。それでこそ罰になると。

「私がされた事は全部許すよ。だから、それで少しでも自分を許せないかな……？」

先ほどとは一変して、やみひめが自信なさげに眉尻を下げる。自分でも、これで万事解決とは思っていない。

それでも、少しでもクラウの罪の意識が減らせるのならと、必死で考えた。

「……」

クラウの瞳が揺れる。許されたい。けど、それでいいのかと葛藤している。

「前にね、こんな事を言ってた人がいるんだ。『犯した罪は消せない。しかし、贖罪（しょくざい）は可能だ』って」

ツバキがやみひめの家に滞在した際、彼女は、やみひめの両親に暗示をかけ、自分は親戚の子だと思い込ませた。それに罪の意識を感じていたツバキに対して、彼女のパートナーである〈カグツチ〉が言った言葉だ。

「私ね、此処（ゼヘナ）でやらないといけない事が出来た」

クラウが眠っている間に、やみひめはファフロウ姉妹から、ゼヘナで起きている事を聞かされた。〈プレケース〉という敵に脅（おびや）かされている――と。

「クラウには、それを手伝ってほしいんだ。許すって言葉だけで駄目なら、それで贖罪にならないかな……？」

謝罪とは、実際には相手に誠意を示すのが目的ではない。許しを得て、自分の罪の意識をなくすためのものだ。だから、純粋に罪の意識を感じる者は、自分を絶対に許さず、己を責め続ける。それが本当の罰だと知っているから。

そして、そういう相手にこそ、他者が許しを与える必要がある。己を責めたところで、誰も幸せにならない。そんな事をするくらいなら、もっと建設的な罰があると。

「でも……」

一度は光明が差したような表情を浮かべたクラウだったが、内罰的な傾向があるのか、まだやみひめの提案に納得しきれてないらしい。

そこへ――

「――俺も覚えてるぞ」

この場にはいなかった、どこか気怠（けだる）げな男性の声。やみひめは、その声にはっとして、談話室の扉の方を見た。扉は開いており、その左右にはファフロウ姉妹が立っている。彼女等は、来訪者の存在を知っていたという事だろう。いや、それよりも何よりも。

「アサト！？」

やみひめが、先の言葉を発した人物の姿を認め、彼の名前を呼んだ。

橘（たちばな） アサト。

やみひめと同じ地球人で、高校三年生。

ごくごく平凡な容姿だが、男性にしては長めの黒髪と、年齢に不似合いな気怠（けだる）い雰囲気が特徴といえば特徴かもしれない。

「橘（たちばな） さんだけじゃありません。私もクラウさんの事を覚えていますよ」

アサトに続いて入室してきた少女が言った。

彼女の事も知っている。やみひめが一連の事件と関わるきっかけとなった人物――ツバキ・タカチホだ。

やみひめより一つだけ年下でありながら、大人びているというよりは、達観した性格の持ち主である。

左側でサイドポニーにしたセミロングの黒髪と、穏やかな色を湛（たた）えた蒼玉（サファイア）のような青い瞳が印象的な、控えめに言っても可愛らしい少女だ。

「ツバキも……？　え？　え？」

此処（ここ）がゼヘナである以上、ツバキがいるのは当然だ。彼女の故郷なのだから。

だが、アサトも此方（こちら）に来ていた事、ツバキが彼と一緒に現れた事など、いきなりすぎて処理が追い付かないやみひめは、ただただ狼狽（うろた）えるしかなかった。

●
●
●

新たに訪れた人物達と入れ替わるように、獣のような耳と尻尾を備えた二人――まったく似ていないが姉妹らしい――が出ていったため、談話室には現在、六人の人間がいた。

クラウは彼等を順に見渡す。

テーブルの角を挟んで左斜めにいるのが、この場でもっとも見知った存在。小学校のクラスメイトにして親友の少女――流遠（るとお）やみひめ。

自分と違い、ごく一般的な小学六年生といった体格。ポニーテールにした長い黒髪がトレードマークで、ツリ目なのに攻撃的な印象はまるでない橙色（だいだい）の瞳も、彼女の快活な性格に似合っていて印象に残りやすい。小学生離れした容姿のクラウにとって、やみひめの可愛らしさは、ある種の憧れだった。

やみひめの左隣に座っているのが、この場で唯一の男性で、彼女の想い人でもある少年――橘（たちばな） アサト。

見た目は普通の高校三年生なのだが、その身に纏（まと）う気怠（けだる）い雰囲気が尋常ではない。ポー

ズで『めんどくせーな』とか言っている若者のそれではなく、『めんどくさい』と口に出すのも面倒なんだろうなと思わせる、本物の気怠さだ。

クラウにとっては、面識はあるが、共通の知人を介した知り合いといった程度の間柄である。

アサトの斜め左、クラウにとってはテーブルを挟んで正面の位置にいるのが、この場では最年長に当たる女性――ロゼット・コダール。

長い金髪と、澄んだ青い瞳の、とても綺麗で優しい人。先ほどの会話の通りなら三十二歳らしいが、大学生と言われても信じてしまえる若々しい容姿である。

「？」

「――っ！」

なんとなく見つめていたロゼットと目が合い、クラウは妙に気恥しくなって目を逸らした。ちらと視線を戻すと、ロゼットは気を悪くした素振りなど微塵も見せず、にこにことこちらに笑みを向けていた。

初対面のはずなのに、そんな感じがしない。なぜか気になってしまう、不思議な存在。

ロゼットの斜め左、アサトにとっては正面にいるのが、クラウにとって微妙な存在となる少女――ツバキ・タカチホ。

自己紹介によると、クラウややみひめより一つ年下の小学五年生らしい。外見はやみひめと同じく年齢相応なのだが、丁寧な口調や、大人びているというよりは達観した雰囲気が、見た目との激しいギャップを感じさせる。

サイドポニーにしたセミロングの黒髪。蒼玉を思わせる青い瞳。控えめに言っても可愛らしい容姿で、クラウにとっては羨ましい限りだ。

だが、彼女がクラウにとって微妙な存在である理由は、その容姿を妬んでいるからとかではない。地球で、〈カタストロ〉と呼ばれる存在に意識を奪われていた時、戦った事がある。そして、クラウとしての意識がある際には、一度もコミュニケーションを取った事はない。

互いに知ってはいるが、本当の意味での面識はない相手と同席するというのは、微妙を通り越して居心地が悪い。クラウにしてみれば、その記憶すら失っていたのだから。

そして、ツバキの左隣、やみひめにとっては正面で、クラウからすればテーブルの角を挟んで右斜めにいるのが、ロゼットと同じく初対面となる少女だ。アサトとツバキに続いて談話室に入ってきたのだが、自己紹介で名前だけを告げると、その後はずっと口を噤んでいる。

カナコ・T・シングウジ。高校二年生らしい。

前述の通り、彼女は名前しか名乗らなかったため、それをフォローするようにツバキが補足してくれた。ツバキと同じ〈機獣少女〉――〈機獣少女〉に関する概要はロゼットが教えてくれた――で、とても強い人だそうだ。

「――――」

その落ち着いた佇まいは静謐で、日本の女子高生のイメージからはかけ離れている。長い黒髪と、縞瑪瑙を思わせる黒い瞳は、派手ではないが隙なく整った容姿と合わさる事で、クラウの脳裏には大和撫子という表現が浮かんでいた。

ずっと黙っているが、それは人見知りの類ではなく、ただ単に口数が少ないだけなのだろう。

時折、ちらりとアサトを気にするような素振りが見られるのが、やや気にはなったが。

「――でも良かったよ、合流出来て。アサトだけ逸れちゃったと思ってたから」

心底、安堵した様子で言ったのはやみひめだ。彼女とクラウ、そしてアサトは同じ場所にいたにも関わらず、彼だけが離れた位置に転移したらしい。

そう、転移だ。クラウ達は、地球からこのゼヘナという星に、一瞬で移動した。その話を聞かされた際には当然、半信半疑だったが、よく似てはいるが微妙に異なる技術や文化、そして地球には一つしかないはずの月が二つある事実に、此処が別の星だと認めざるを得なかった。

「ああ。あのままツバキ達が来てくれなかったら、荒野の真ん中で途方に暮れてただろうな……それはそれとしてだ、やみ子」

「なに？」

アサトが気怠い口調で言うと、やみひめは小鳥のように小首を傾げた。

「離れろ」

「やだ」

攻防は一瞬だった。アサトがジトっとした目を向けるが、やみひめは断固拒否といった表情で、よりぎゅっと彼の右腕を強く抱き寄せた。

一瞬、その光景を見ていたカナコの表情が鬼の形相に変わったように見えたのは、クラウの見間違いだったのだろうか。瞬きをした直後には、静謐な大和撫子がいるだけだった。

「……なに？」

「あ、別に……なんでもないです」

「そう」

クラウの不審な態度を追及する事もなく、カナコは自分に用意されたマグカップを口に

運ぶと、また沈黙を保った。

先ほどアサトが言っていた『ツバキ達』というのは、カナコも含まれている。もしかしたら、その際にカナコとアサトの間に何かあったのかもしれない。

「――それでは、自己紹介と、おおまかな状況説明も済みましたし、そろそろ本題に移ろうかと思います。構いませんか、カナコさん」

「ええ。この場でもっとも状況やメンバーを把握出来(でき)てるのはツバキでしょうから、任せるわ」

この二人は上司と部下といった関係ではないらしい。それでもツバキがカナコにお伺いを立てるのは、先輩に対する義理立てのようなものなのだろうとクラウは判断した。年長者という意味ではロゼットもいるが、彼女は此処(ここ)では『部外者』というか、口を挟む立場ではないのかもしれない。

「やみひめさん」

「うん。私はツバキに協力するよ」

ツバキが水を向けると、内容を聞くまでもなく、やみひめは答えた。この二人の間には、すでに阿吽(あうん)の呼吸のようなものが出来ているのだろうと思うと、クラウは少しだけ胸が痛んだ気がした。

『――よいのか？　今度こそ、其方(そなた)には関わり合いのない話だぞ』

「え？」

不意に聞こえたスピーカーを通したような女性の声。驚いたのはクラウだけでなく、アサトも同様のようだった。この場にいる六人中、二人だけがきょろきょろと声の主を探す。

「そういえば、橘(たちばな)さんもお話しする機会はありませんでしたね」

ツバキが首に下げていた黒い勾玉(まがたま)のようなネックレスを掲(かか)げ、全員によく見えるようにした。どうやら、先の言葉を発したのは、それらしい。

『ＭＢデバイスの〈カグツチ〉だ。ツバキのパートナーと思ってくれれば、それでよい』

「久しぶりだね、〈カグツチ〉。あの時は、お別れが言えなくて……ごめんね」

『よい。気を遣わせぬために黙っておったのだからな。それに、こうしてまた出会えた。好ましい状況とは言えんのが残念だが』

「そうだね。でも、また会えたのは私も嬉しいよ」

クラウは〈カタストロ〉から解放された後の事は知らないため、やみひめと〈カグツチ〉の会話内容は推測する事しか出来ないが、ツバキが地球から去った時の事だろう。

「要は人工知能とか、そういうもんか？」
アサトが興味深そうに、テーブル越しに〈カグツチ〉に肉薄する。
「た、橘さん……」
その行動に、ツバキが戸惑ったような声を上げる。
彼にしてみれば純粋な興味からの行動だったのだろうが、〈カグツチ〉はネックレスとしてツバキの首に下げられていた訳で、傍目（はため）には男子高校生が女子小学生に迫っているようにしか見えず、かなり危ない絵面（えづら）となっていた。
「――あ、すまん……」
「い、いえ……」
自分がどう見られているか気付き、アサトが居心地悪そうに元の位置に戻った。ツバキも、もじもじと身を捩（よじ）らせ、頬（ほお）をほんのりと紅潮（こうちょう）させていたが、嫌悪感のようなものは感じていないように見えた。
そのラブコメのような光景に当然、やみひめはジトっとした目を向けていたのだが、
「……」
クラウの斜め右に座っている人物、つまりカナコも、やみひめと同様の目をアサトに向けていた――ような気がした。
『気がした』というのは、先ほどと同じように、見間違いかとクラウが瞬きをした直後には、カナコの表情が静謐（せいひつ）なものに戻っていたからだ。
「……？」
「なに？」
「えっと……なんでもないです」
「そう」
やはり先ほどと同じような問答をして、カナコはマグカップを口元に運ぶと、沈黙を再開した。
（私、疲れてるのかな……？）
医務室で睡眠をとったとはいえ、驚きの連続で精神的なストレスはかなり蓄積されているだろう。
「ブランさん、体調が優れないようでしたら、今日はここまでにしておきましょうか？」
疲れているかもという気持ちが、表情に出てしまっていたのかもしれない。ツバキが、気遣うような口調で言ってくれた。
「ううん、大丈夫」
彼女の気配りに感謝しつつ、クラウは続けた。

「私、とんでもない事をした。でも、何も覚えていなくて、思い出した時には、全部なかった事になってた」

世界改変の事は、やみひめから聞いただけだ。なので、まだ信じられないというのが本音ではある。

「だけど、一番迷惑をかけたやみひめが覚えていて、許してくれて、それでも足りないなら、手伝ってほしいって。それが贖罪になるからって」

クラウが『そうだよね』という気持ちでやみひめの方を見ると、彼女は肯定するように、笑顔で頷き返した。

「橘さんとタカチホさんも、覚えてるって言ってくれた。それは、私に罪を償う機会をくれるっていう意味ですよね」

「といっても、俺は特に何の被害も受けてないから、やみ子を手伝ってやってくれ」

「俺に奉仕しろ――とか言わなくていいんですか？」

場の空気を和ませるためか、ツバキが冗談めかして言った。

「……ツバキの中で、俺はそんな鬼畜なイメージなのか？」

「冗談です」とアサトに告げると、ツバキは少し困った顔をクラウに向けた。

「ブランさんは〈カタストロ〉に利用されていただけですから、私も遺恨はありません。それでも何かしたいと言ってくださるのなら――やみひめさんと一緒に、私達を助けてください」

『罪を償う』という言い方に、逆に罪悪感を与えてしまったのかもしれない。だからツバキは、そんなつもりはないと、『助けてくれ』という言い方をしたのだろう。クラウはその気遣いに感謝した。

「私に何が出来るか判らないけど、私に出来るなら、私でいいなら――手伝わせて」

その言葉に、皆が好意的なリアクションで応えてくれた。

クラウは少しだけ、気持ちが軽くなるのを感じた。気が早いのは承知している。それでも、償えるんだという事実に、彼女の心はすでに救われていた。

つづく

あとがき

どうも、流遠亜沙（るとおあさ）です。

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL REVIVAL』第二十話をお届け致します。

リアルタイムでお読みくださっている方はお気付きかもしれませんが、今回から登場人物紹介の次のタイトルが、『REUNION』から『REVIVAL』に変わっています。リアルタイムじゃない方は、「え？　十八話から『REVIVAL』だったじゃん」と思われるでしょう。

詳細はブログにて！　ここではスペースが足りないので、そちらでご説明いたします。

あとがきなので本編についても触れたいと思います。

舞台が地球からゼヘナに移行しました。クラウがレギュラー化し、カナコやファフロウ姉妹も活躍しますので、引き続きご愛読ください。

……触れられてませんね。今回のあとがきはブログ任せです。

それでは謝辞を。

主にクラウ関連のチェックをお願いしている紙白さんに感謝を。ロゼットが登場し、チェック項目が増えますが、今後もよろしくお願い致します。

ベアトリーチェの射撃装備〈トーレ・アルコ〉の発案者であるenigma9641さんに感謝を。今回は誤字・脱字のチェック協力、ありがとうございました。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。

内容は相変わらず地味です。願わくば、地味な部分を楽しんでいただけている事を。

２０１６／１０／１１　流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX　第2部』小説ページに戻る